

メッセージアウトライン コリント人への手紙 第一16:5～12 「パウロの伝道計画」

[5-6]「私は、マケドニヤを通過した後、あなたがたのところへ行きます。マケドニヤを通るつもりでいますから。そして、たぶんあなたがたのところに滞在するでしょう。冬を越すことになるかもしれませんが。それは、どこに行くとしても、あなたがたに送っていただくと思うからです」

パウロは今、小アジアのエペソに滞在している。マケドニヤはエーゲ海を挟んだ対岸の北部。ピリピ、テサロニケ、ベレヤといった町々のある地方。彼は第2回伝道旅行の時これらの町々に教会を立てた。それゆえパウロはその地方の教会を巡って、励まし、慰め、強めるための訪問をしようとしていることがわかる。そして彼はその後、コリントへ行く。しかもそれは通過するだけではなく滞在し、冬を越すことになるかもしれないと言う。これはじっくりと腰を据えてコリント教会の人々を教え、導こうとの考えであろう。そして、親しい交わりのうちに彼らのところから送り出されたいとの計画である。

[7]「私は、いま旅の途中に、あなたがたの顔を見たいと思っているのではありません、主がお許しになるなら、あなたがたのところにしばらく滞在したいと願っています」
このようにキリストのしもべとしての使命に徹するパウロは、いかに進むべきか、いかにとどまるべきかということをはっきりと自覚し、計画的に生きている。そして重要なことは「主がお許しになるなら」である。これはあくまでも主のみこころを第一にして、それに従おうとする生き方である。→ヤコブ4:13～15、I コリント10:31

[8-9]「しかし、五旬節まではエペソに滞在するつもりです。というのは、働きのための広い門が私のために開かれており、反対者も大ぜいいるからです」

五旬節とはユダヤ人にとって最も大切な過越の祭りから数えて50日目に新しい穀物のささげ物を主にささげ、記念とする祭り。これは春に行われる。五旬節には大ぜいのエペソ在住のユダヤ人たちがこの祭りを祝うために集まるので、それが伝道のための良い機会となる。もちろん反対者たちも大ぜいいるが彼はそのことも承知の上である。

[10-11]「テモテがそちらへ行ったら、あなたがたのところで心配なく過ごせるよう心を配ってください。彼も、私と同じように、主のみわざに励んでいるからです。だれも彼を軽んじてはいけません。彼を平安のうちに送り出して、私のところに来させてください。私は、彼が兄弟たちとともに来るのを待ち望んでいます」

ここでは彼の同労者テモテへの配慮が述べられている。パウロは彼をコリントへ派遣していた。→I コリント4:17 彼はまだ若く弱さもあった。→II テモテ1:6～8、2:1,3,15,4:1-2 パウロは彼がコリントでの使命を果たして無事に平安のうちに送り出されて帰って来ることを願う。兄弟たちとはエラスト(使徒19:22) や、このコリント人への第一の手紙を持って行った兄弟たちのことか。

[12]「兄弟アポロのことですが、兄弟たちといっしょにあなたがたのところへ行くように、私は強く彼に勧めました。しかし、彼は今、そちらへ行こうとは全然思っていない。しかし、機会があれば行くでしょう」

アポロはアレキサンドリヤ生まれの雄弁なユダヤ人クリスチャン。彼はパウロとともに働いていたプリスキラとアクラ夫妻から詳しい教えを受け、コリントへ渡って伝道し、「私はアポロに」(1:12)という分派ができるほどの魅力的な伝道者。→使徒 18:24~28

この文からはパウロとアポロの間に仲たがいのあった様子うかがえない。それゆえコリントでのパウロ派やアポロ派の争いは本人たちの知らぬところでの争いであったのである。アポロはこのような時期にコリントへ行くことはいっそうの混乱をきたすかもしれないと思ってパウロの勧めを受けながらもこの際に行かないと決めたのではないだろうか。しかし二度と行かないと言うのではなく「しかし、機会があれば行くでしょう」とパウロは書き添えている。こういうところにも彼らしい深い思いやりがうかがえる。

パウロはこのようにコリントのクリスチャンやテモテやアポロに対して、心からの思いやりと愛をもって接している。またキリストのためなら何でもするという伝道の姿勢も見習いたい。私たちが自分だけの世界に閉じこもるのではなく、キリストのために精一杯自分の人生を費やすものとなっていきたい。→I コリント 6:19~20